芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No.48　55. 10

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・挾　間　正　年　編集人・尾　登　一　信

シルク・ロードの旅に思う

大分県芸術文化振興会議顧問　河　野　　彰

私は昨年、ある歴史研究団体のシルク・ロード調査団に参加して旅行する機会に恵まれた。北京を基地として、新疆ウィグル自治区の省都ウルムチに飛び、そこから車でトルファンに行き、更にウルムチに引返し、空路、蘭州、西安とたどることが出来た。

旅行は、団長が江上波夫氏（東大名誉教授）で、一行40名、歴史家あり、学校教師あり、医師、会社々長ありで、職業もいろいろであったが、中近東の歴史遺蹟を幾度かたずねた人達ばかりだったので、ずぶの素人の私には色々と教えられることが多かった。

ところで、トルファンはそれまでに日本人で足を踏み入れたものは、ごく僅かな人しかいなかったようだ。ここには、かつて今世紀の初め、スタインや大谷探検隊などが苦心して踏査した色々の遺蹟の多いところで、なかでも私たちが行った交河故城、ベセクリクチ仏洞、高昌故城、アスターナ古墳など、それらを直接見ることが出来たのは感激であった。

中国彩色土器壺

これらの文化遺蹟が、シルク・ロードの終着駅日本の古代文化に強いかかわりをもったことを考えることは、そこに実際立ってみて、興奮を押えることが出来なかった。

トルファンは、天山山脈の南麓に位置するオアシスで、その一帯は、中国でも最も低い盆地、一番低いところは、－150°にも達するというが、3月下旬というのに割合と暖かかった。砂漠地帯なので、空気がかわき、一年の総降雨量30粍ということでもわかるが、うっかりすると脱水状態になるということであった。

昔からシルク・ロードの重要な経路になっており、高昌故城などは三世紀以来中国との関係も深く、五世紀末からは蘭州生まれの漢族麴氏の支配下にあり、仏教文化が栄えたという。七世紀になって唐に滅されたが、玄奘三蔵法師も印度への求法の旅の途次ここに3ケ月滞在した。その後ウイグル族の支配、ジンギス汗の破壊を経、幾多民族の興亡が繰返されたが、それにも拘らず、ここは東西文化の交流点として、日本への強い影響をもたらしたわけである。

次に訪れた蘭州では、その地の博物館で見た彩陶壺の妖しい美しさに目を奪われた。新石器時代後期のもので、甘粛省一帯から多数出土したものである。はじめ1923年スエーデンの地質学者にして考古学者アンダーソンによって初めて発見されたが、今日でも当時の住居跡や墓などから多数発掘されているという。その文様は一見して西トルキスタン風のもので甚だエキゾチックである。発見者アンダーソンもその起原を西に求めたというが、戦後、ここより東、陝西省から中国の学者によって、それより更に古い時代の彩陶が発掘され、どうやらその起原を中国の中原から西に伝播して甘粛省の方の仰韶文化を生み出したことが明かになりかけたという。その起原が西か東か問題のあるところであるが、文化の交流というものはそんなもので、考古学的にはどうであれ、東西それぞれに影響し合って出来上がったものではなかろうか。

少し飛躍して恐縮だが、今日の文化を考えるのにしても地方を中央に対比して論ずることが多いが、凡そ芸術の仕事は、地味な個の努力の積み重ねの結果であって、それが結果として、互いに影響し合い、時間的にも地域的にもその中の個としての存在価値があるのではなかろうか。せっかちに育つものとは考えられないものと感じた。

——カットも筆者画く——

第16回大分県芸術祭開幕行事
「おおいたの祭り」を担当して

大分県洋舞踊協会会長　樋　口　愁　枯

芸術祭開幕行事「おおいたの祭り」から

いま、大分県芸術祭開幕行事「おおいたの祭り」の幕が降りた。

あまりにも息せき切って、全力疾走のあとの胸の鼓動はおさまらない。

過去２回の大分県芸術祭公演の、体験と反省をもとにして取り組んだものの、やはり前轍の溝は深く、いざ構成、動員となると、さまざまなつまづきに出会い、試行錯誤と朝令暮改の模索だった。

「おおいたの祭り」が、成功とか不成功とかいうことは別として、ただ生みの苦しみと、もがきの挙句、どうにか開幕行事を終了した。というのが実感。その荒い呼吸の中から、今その反省や検討の余裕もないまま、思い出すがままの、今回の公演が教えてくれた一、二を、書きとめてみたい。

（その一）力強い若手舞踊手の台頭

それぞれの発表会形式の公演は、何処の研究所も年に数回開いている。その中で、コリフェ（群舞の頭）となり、時にはグランシュジェ（五、六人の踊り）又はヴァリアシオンの役付きとなって、研究所の発表会を支えている若手中堅舞踊手の、目ざましい演技力を確認できた収穫は大きい。

合同公演や合同練習は、より自己を高める上にも、お互いの磨きあいの上からも、重要なことであることを痛感させられた。

（その二）生徒間に親睦融合のきっかけとなった。

稽古場では師に対して、絶対の信頼を寄せている生徒たち。それはともすれば、研究所の殻に閉じこもり、時として、思い上がりに執着する結果ともなりかねない。肩を張り、さげすみの眼に一沫の不安を抱いていたものの、この心配は全くの取越苦労であった喜び。

楽屋と楽屋に、お互い友情の美わしい情景が醸し出されているのを見て、強く胸を打たれた。

（その三）生徒の演技に拍手を……

今回は、主宰者も舞台に立った。舞台登場に観客からの熱い拍手が贈られた。

一つ間を置いて考えてみると、この拍手が多分に儀礼をこめたものであったにせよ、もう一つ、渾身の力を込めて踊りを「踊る」生徒達の演技にも励ましの声援をいただけたら……

とにかく幕は降りた。

主宰者も生徒も、ステージのスタッフも、思わず力強い握手が誰からともなく交わされた。その一人一人の目に感激の涙が光って美しい。

この感動と興奮は、これまでの苦労を一瞬にして凝縮変化させて、舞台人の明日からのエネルギーとなるのだろう。　そんな気がする。

[redacted]

「おおいたの祭り」ほんとうにご苦労様でした

大分県洋舞踊協会顧問　平　瀬　克　美

「手づくり」、「大分のまつり」、と言う声を聞く度にあれこれと想像し、その開幕をたのしみにしていました。いよいよ当日になり、音楽が聞こえ、幕が上がり……最後の幕が降り、会場から大きな拍手が起こった時、私は「協会の先生方ご苦労様でした」とつぶやいていました。作品がどうだこうだと言う以前に、この大きな行事を無事なしとげた喜びが胸にじいんと来ました。

ご承知と存じますが、協会の八人の主宰者の先生方は、どの先生もお一人で堂々と大作を発表して来られた一国一城の主ばかりでございます。その先生方が一つになって力を合せ、一つの作品を作り、然も会員全員がその舞台に立つと言う事は並々のことでなく、おそらく他では見られないのではないでしょうか。言う迄もなく、これにはいろんな困難が伴うのが当然、その困難を克服しての実現であり私は本当に立派だと思いました。

協会もここで20年を迎え、立派な「しにせ」となり、立派な「のれん」をかかげることが出来たと思います。それに、舞台を見て強く感じたことは、若いダンサーが非常に伸びたと言う事です。今や日本の洋舞界は目覚しく発展しており、日本で「世界バレーコンクール」が開催されたり、日本のバレリーナが外国の本場の舞台で外人と四つに組んで踊り、絶賛されたり、日本のバレー団の舞台作りに本場の方があたったりしている時代です。私はこの大分の若手のダンサーの中から世界にはばたくダンサーが生まれることもあながち夢ではないような気がいたしました。

協会は既に「白鳥の湖」、「朝日長者」と言う財産を作っており、今回更に立派な手づくりの「大分のまつり」と言う財産を作りました。この若い方々の成長をたのしみにしながら、協会が更に大きな手づくりの財産づくりをして下さるものと期待しています。

最後に、「ご苦労様でした。おつかれ様!!」

箏と尺八ジョイントリサイタルについて

尺八演奏家　板　井　南桜山

今回、菊池歌幸、板井南桜山ジョイントリサイタルとして一〇月二六日（日）芸術会館で開催した。くにさきの仏教行事をとりあげ、地元の素材を地元の作詩作曲、地元の演奏家にかけるという形で、ふるさと文化の源流を訪ねてみることにした。

リサイタルの中心曲は「くにさきの印象」（瀧本利一郎作曲）で第一楽章は山々にひびくほら貝の音、大太鼓のひびき、昔の六郷満山に栄えた多くの寺の大伽藍から山にこだまする読経の声をあらわし、第二楽章は盲僧琵琶の祝詞、第三楽章は養老年間から伝えられている天然寺、岩戸寺などの修正鬼会の模様、終曲は今の六郷満山で無住寺になったさびしい寺のほとり、松の梢をわたる風の音と共に、木の間をもれる月かげをふみつつ行く旅人の姿をえがいたものである。

この「くにさきの印象」に配する曲として「高田ヤンソ」（加地静日作詩　瀧本利一郎作曲）をとりあげた。これは昭和四三年に豊後高田市から依頼を受け、草地りとは対照的に静かな仏の里にふさわしい唄がほしいという希望によりつくられたもので、宗教的な落着いた民謡である。今一つ「くにさき」を表現するものに、盲僧琵琶がある。天台秘密の加持祈祷は昔から庶民の心の支えとして喜びにつけ悲しみにつけ生活に密着したものであり、今は琵琶法師も数少なく貴重な存在となった。今回は抜粋として般若心経　荒神和讃をとりあげた。以上は本山、中山、末山というくにさき仏教を形成する中で部分的ではあるが、くにさきの印象を野仏の姿を心にとめながらえがいたものである。

リサイタルでは、これ以外に従来からの名曲である古曲　新曲を数曲とりあげまた近代的な感じをもたせてポピュラー曲を尺八、ピアノ、ギターで演奏するという形をとっている。

中国の仏教遺跡を訪ねて

大分合同新聞論説委員　狭　間　　久

（宇佐市天福寺奥の院とそっくりな塑像（右）第55窟）

別府大学学術訪中団の一員として、7月16日から15日間の日程で、中国へ行ってきた。訪中団の目的は、大分県に豊富な古代仏教文化遺跡の源流を中国の仏教文化にさぐることだ。

訪中団が最も期待したのは、①大分県の磨崖仏のルーツを中国の磨崖仏に求めること　②宇佐市虚空蔵寺跡出土の塼仏（仏像を浮き彫りしたレンガ状の粘土板）の原型を捜すこと　③宇佐市天福寺の塑像（粘土製の仏像）の原型を捜すこと―などだ。

訪中団はそれらの解明のため、大同市の雲岡石窟、敦煌の莫高窟、西安市の三カ所を重点的に調べた。

雲岡石窟では、大分県の磨崖仏の源流を求めたのだが、正直なところ、スケールの大きさに圧倒されて、とても比較、対照にはならないことがわかった。

雲岡石窟は、竜門石窟（洛陽）へと引き継がれているのだが、今回は竜門石窟を見学できなかったこともあって、大分県の磨崖仏との関連研究は今後に残された課題だ。

敦煌の莫高窟は、崖面が親指大の小石交ざりの粗々しいれき（礫）岩。崖面に石仏を彫ることは不可能。このため窟内の仏像はすべて土でつくられた塑像だった。敦煌文物研究所の研究員に宇佐市天福寺の塑像の写真を見せたところ、そっくりなのがあると案内してくれた。

それは第55窟の2メートル余の勢至像だった。唐代の作で、ふりよかな仏像。技法など、天福寺の塑像は明らかに敦煌の塑像の影響・感化を受けていることがわかった。

これに続いて大きな発見は、第215窟の前室の壁面に、塼仏が張りつけられていることがわかったこと。その塼仏は宇佐市虚空蔵寺跡出土の塼仏より一回り大きなもので、日本では飛鳥の川原寺裏山から出土した塼仏とそっくりだった。

塼仏は日本では大和を中心にかなりの数が発掘されている。しかしまだその用途については決定的なことはわかっていなかった。それが今回敦煌莫高窟で、明らかに壁面を飾るものとして塼仏が使われていたことが確認されたことは、画期的といえる収穫だった。

塼仏については、西安市でも三種類発掘されていることがわかり、成果があった。

成果としてはいま一つ、豊後高田市富貴寺の壁画浄土変にそっくりの壁面を敦煌莫高窟に見つけたことがあげられる。それは第 217窟の極楽浄土を描いた壁画だ。

このように塑像、塼仏、壁画と、敦煌、あるいは西安と大分県の仏教が酷似していることは、古代、中国と大分県との密接な文化交流を考えさせる一つの問題提起といえるのではなかろうか。

その問題の解決・研究はいま始まったばかり。今後の調査研究が期待される。

第16回大分県芸術祭主催、共催、特別参加行事

主催行事

部門	行事名称	期日<期間>	開会時間	会場	主催団体
開幕行事 舞踊	おおいたの祭り	10月1日(水)	13：30～ 18：30～	県立芸術会館文化ホール	大分県洋舞踊協会
		11月16日(日)	13：30～	竹田文化会館	
閉幕行事 音楽	大分交響楽団特別演奏会	11月30日(日)	~~18：30~~～ 14:00～	県立芸術会館文化ホール	大分交響楽団

共催行事

部門	行事名称	期日<期間>	開会時間	会場	主催団体
文芸	第16回大分県芸術祭共催 短歌コンクール	10月12日(日)	10：00～	大分文化会館第1小ホール	大分県歌人クラブ
	第16回大分県芸術祭共催 第14回俳句大会	10月12日(日)	10：00～	大分県社会福祉会館	大分県俳句連盟
	第12回大分県川柳大会	10月12日(日)	10：00～	大分県教育会館	大分県番傘川柳連合会
美術	第16回大分県美術展覧会	書道 9月30日(火) ～10月5日(日) 日洋彫工 10月7日(火) ～12日(日) 写真 10月14日(火) ～19日(日)	9：00 ～17：00	県立芸術会館展示室	県立芸術会館
音楽	第8回大分県音楽コンクール	10月12日(日)	9：30～	県立芸術会館文化ホール	大分県音楽協会
	県民オペラ 「ヘンゼルとグレーテル」	10月14日(火)	18：30～	大分文化会館大ホール	大分県県民オペラ協会
	第14回大分県職場音楽祭 ――音楽の夕べ――	10月20日(月)	18：00～	大分文化会館大ホール	大分県職場音楽連盟
	第20回定期邦楽演奏会	11月16日(日)	12：00～	県立芸術会館文化ホール	大分県三曲協会
	大分県吹奏楽フェスティバル	11月16日(日)	13：00～	中津文化会館	大分県吹奏楽連盟
演劇	童話劇「森の小人」・戦後別府物語―星の流れに―	11月8日(土)	12：30～ 18：00～	大分文化会館大ホール	大分県民演劇制作協議会
	大分県演劇祭	11月18日(火)	9：00～	日田市民会館	大分県教育委員会
総合	第5回大分県高等学校中央文化祭	11月14日(金) ～17日(月) 11月24日(月) ～28日(金)	9：00～	寿屋百貨店佐伯店 佐伯市商工会館 佐伯文化会館	大分県高等学校文化連盟

特別参加行事

部門	行事名称	期日<期間>	開会時間	会場	主催団体
美術	文化庁所蔵 世界名作美術作品展	10月22日(水) ～ 11月5日(水)	9：00 ～7：00	県立芸術会館	県立芸術会館
	マックス・クリンガー展	11月18日(火) ～ 12月7日(日)	9：00 ～17：00	県立芸術会館	県立芸術会館
音楽	秋吉敏子＝ルー・タバキン ビックバンド演奏会	10月4日(土)		県立芸術会館	大分合同新聞社
	音楽劇「楢山節考」	10月10日(金) ～ 10月11日(土)		県立芸術会館	県立芸術会館
	郷土出身音楽家シリーズ 「藤沼昭彦リサイタル」	11月18日(火)	18：30～	県立芸術会館	県立芸術会館
舞踊	文化庁移動芸術祭 巡回公演　モダンダンス	10月16日(木)	18：30～	竹田文化会館	竹田市文化会館自主事業運営協議会

梅園と長寿論

梅園学会会員　白井　淳三郎

湯川秀樹博士が、三浦梅園について書いておられるものを読んで実感するのであるが、博士は梅園について語ることが、楽しくて、楽しくてたまらないらしい。辛島詢士翁も、去年から何度も心臓の発作を起こし、幾回か死地を脱したような健康状態にも拘らず、梅園全集の中の詩轍という論文を読んでいて、徹夜するほど熱中したと聞く。

古来、天才というような人々にとって、研究なり、創造なり、彼らの仕事は楽しくて、楽しくて止められないものであろう。彼らにとって、努力することは即ちあそびなのである。辛島詢士翁にとって、梅園全集を読むことは、梅園と一問一答しながら、遊んでいるようなものなのである。理解できようが、できまいが、意に介することはない。このような心持で、梅園哲学に接していれば、だんだん理解の程度も深まってくるであろう。少しでも分ってくると、益々面白い、たのしいという循環がはじまる。登山の専門家が、むづかしい山ほど魅力を感ずるのと同じことであろう。

こういう型の人々は　般に長寿である。人生のありとあらゆるストレスを遊びの中で解消してしまうからである。中津市に須藤壮という九七歳の漢詩人がいる。私の如き青二歳のつくった詩について、私よりも小さい字で御批評の御手紙をくださる。字も文章も少しも毫碌を感じさせない。漢詩を読んで、漢詩をつくり〝若い人々相手に指導されている須藤翁にとって、これ位たのしい生き甲斐のある御仕事は亦とないのであろう。

孔子が論語の中でいっているではないか。如何に努力している人々も、これを楽しんでいる人々にはかなわない。

今の教育がいろいろむづかしい問題を抱へていることはよく分る。併し最も大事な、このたのしさを忘れているならば、如何なる高尚な教育も、砂上の楼閣となってしまうのではあるまいか。昔は清貧を楽しむ哲人もいたのである。

玖珠町文化活動の現況

玖珠町中央公民館長　豊国文隆

昭和四五年、教育委員会が町内の文化サークルに呼びかけて合同発表の機会をつくった第一回玖珠町文化祭。公民館の二階の小さな部屋に、短冊に書いた俳句短歌、書道を展示するだけのものであった。

迎えて第一一回玖珠町文化祭が『芸術文化を人の和に』をテーマに、一一月二日・三日の両日、昭和四七年一〇月サークル相互の親睦と研修を目的に結成された玖珠町文化振興会議と教育委員会の共催で開かれる。

文化振興会議の結成と共に、急速に文化活動が本格化し、現在は短歌、俳句、邦楽、詩吟、謡曲、民謡、舞踊、華道、茶道、南画、書道、手芸、木工に三八のサークルが加盟し、展示の部、出演の部に分れ、中央公民館全館を使用して、午前、午後、夜間と町民多数の参加で賑う。展示の部では、必ず会員の誰かが展示場に説明役について参観者の質問に応じて居り、書画については、ほしい人には書いて差しあげ喜ばれている。

玖珠町の文化グループのそもそもの発生は、昭和三〇年代公民館活動としてのサークル、趣味講座からであるが、現在は、ほとんどの団体が、公民館を練習、研修の場として自主的に運営活動を続けており、大きなものでは二百人近い団体もあり、内部でお互いに指導育成し合っている。

文化祭について、町文化振興会議の会長は、文化祭のための作品であってはならない。生花についても高価な市販材料でなく、手近にある野草の利用を考える。塾化してはならない。プロ化してはならない。一般大衆と結びついたものでなければならない。そして、町民誰もが何かのサークル、グループに入って貰いたいと意欲に燃えている。

玖珠町は、童話の里づくりとともに、文化の香り高い町づくりに邁進しなければならない。

大分市王子中学校
中庭にて
ありし日の広瀬氏

広瀬晴四郎氏（大分県芸振会議事務局次長）

八月二十七日・急逝される

「少し油断しとったナアー」とかみしめるような口調で数分間話し合ったのが氏との最後になった。八月一九日医師会アルメイダ病院・ＩＣＵ室でのことである。八日後の二七日午前四時半、心筋こうそくの発作が再度氏を襲い、入院十数日、四九才を一期として急逝された。ほんとうにあまりにも、あまりにも突然のことであった。

芸振事務局で相棒の事務局次長としてこの数年間、氏の助言やいろいろな世話を受けたこと計り知れず、ロマンスグレーの温顔が忘れられない。氏は「イヤ」と言うことを言わない人だった。いつでも、どんなところでも氏のあたたかい心情が雰囲気を和らげた。

氏の好きだった国東の「焼け仏」が遺作となったが、国東が郷里の私は、生死の無情をことのほか痛切に感じ、ここに喪心よりご冥福を祈る次第である。

（大分県芸振会議事務局長・藤原　嘉久）

弔辞

晴四郎先生、こう呼ぶと、あのロマンスグレーの、キチンとした身なりのいつものあなたが、どこからかひょっこり現われて来そうな気がしてなりません。

しかし、それはもうかなえられない事実になってしまいました。先生の元気な姿には、永久に接することができないのだ、と思うと、全身の血が逆流するような気がします。あんなに元気で、ファイトにあふれていたあなたが、こんなにも早く人生の幕をとじようとは、何と悲しいことなのでしょう。

あなたとは、同じ美術の教員として、造形教育の研究を共にし、また、絵かき仲間としても、県美展や二紀のグループで作品を発表したり、東京の美術館を歩いたことなど、いろいろなことが思い出されます。

一方では、大分県芸術文化振興会議で、事務局の仕事を永くつづけ、事務局次長としての手腕を大いに発揮してくれました。県内文化活動のまとめを一手に引き受け、特に文化年鑑編集の功績は大きなものがあります。

こうした中で、あなたに寄せられた人望は非常に厚く、みんながあなたの心の広さ、人間的な暖かさに集まってきていました。そして芸術祭のポスターをかいたり、県民演劇の舞台美術を相当したり、出版記念、展覧会、同窓会のことについては、いつでも中心的な存在となって他人の世話をしていました。

どんなにめんどうなことでも、晴四郎先生、あなたは一口もグチをこぼさなかったですネ。あなたにかかれば、すべてがスムーズに進行し、難解なことでも円満に解決するという人徳がありました。それは、あなたのその人間味あふれる誠意がそうさせたのです。

全くおしい友人をなくしてしまいました。日頃から、「僕は昭和ヒトケタだから注意しなければ」とよく言っていました。そして好きな酒や料理もひかえていたではないですか。これからがあなたの人生が開花し、仕事の面でも家庭的にも、真に軌道にのる時だっただけに、本当に残念でたまりません。

今年は異状気象とよく言われます。今までに長雨がつづいて晴れた日がほとんどありませんでした。心なしか蝉の声にも元気がなく、寂しい悲しい夏です。これがあなたの心と体に何等かの影響を与えたのではないでしょうか。しかしどうすることもできません。

どうか後のことは心配せず、静かにお眠りください。あなたの好きだった、あの国東の仏の里をもう一度通って、あなたの仏像が待っている極楽浄土に行くのです。そしてあの世で思う存分好きな絵をかきつづけてください。

広瀬先生、晴四郎先生、安らかに。さようなら、さようなら。

昭和五十五年八月二十八日

大分県芸術文化振興会議理事
県美協委員、二紀会同人
菅　久

＜れんさい＞ 豊後水道の文芸 その8

大分大学教授　佐々木　均太郎

「迷路」に描く臼杵湾

野上弥生子の全集がでる。今年九五歳で毎日三枚の原稿を書く。わが国最年長の現役作家。弥生子の長編「迷路」（第一部は昭和一一年、続編は昭和三一年完了）にも臼杵湾、からみた豊後水道の描写が幾度も出てくる。主人公菅野省三は、大友宗麟の居城があった古い城下町由木の造り酒屋の次男という設定になっている。由木とは臼杵であり、弥生子の生家小手川酒造に拠ったものである。昭和七・八年ごろの日本における左翼学生運動から脱落した省三が、戦争の泥沼にのめりこんでゆくその後の日本とともに歩いた悩み多い困苦の道を描いた作品である。荒正人は「人間の造型描写に格段の成熟をみせた大作」と評価している。

臼杵に在った省三は隣接の津久見にも出かけてゆく。河口に立った省三の見た豊後水道の景色は、まだのどかで美しかった。

「海は満潮であった。そうして波がなく、左右の岬で黒く縁取られた湾は、馬蹄なりの型いっぱいにびっちり膨れ、青銀いろに輝いていた。七月は鯵のしゅんで、町の素人まで夕方から、慰みがてら酒食を積んで夜釣の船をだすが、月を厭うために、今夜の沖には漁火の赤い点々の群落が消えているのも、眺めをはろばろと清明にしていた。」

それが、大戦勃発の前夜を思わせる風景描写になると「水平線に、先き細りの衽のかたちで浮いている土佐路は、いつのまにか薄灰いろの汐靄に隠された。それに引きかえ、一ひらの雲もない大空は、太陽の方がおとなしやかなくらいぎらぎらとまっ青に照り輝き、それより淡い色ではない馬蹄型の江湾と、左右の長い岬とすべてをただ明るく、が筒ぬけに底のない、なにか痴呆的な単調さがかっとさせていた。午後だしぬけに空模様がかわり、思わぬ疾風になったりするのもこんな日にかぎる。」吹きつのってゆく厳しい時代の風潮、やがて太平洋戦争へと突入してゆく無気味な豊後水道の雰囲気が描かれている。

＜芸振だより＞

◎芸術文化基金の街頭募金実施

昨年８月「大分県芸術文化基金条例」が制定されて目標額4000万円を達成し、本年度も目標額3000万円達成の見とおしもついてまいりましたが、早期に目標額を達成するためと、広く県民にアピールする必要から、11月３日「文化の日」を期して芸振会議役員と事務局職員約30人で、午後１時から３時までの２時間にわたって、トキハ正面入口でチラシの配布と街頭募金を実施し、多大の成果を収めることができました。

◎菅　久理事、本年度大分県教育実践者表彰が決定

県立ろう学校教諭で芸振会議発足以来、事務局職員、次長、さらに理事として活躍された菅　久先生は、昭和55年度大分県教育実践者表彰が決まりました。永年にわたり学校教育現場での絵画教育と芸振会議役員として、大分県芸術祭に多大の貢献をしたことが認められたわけであります。同氏の今後の益々御発展を祈るとともに、心からおよろこびを申しあげます。

◎佐藤七夫主査、文化庁派遣の海外事情視察に出発

文化係主査で芸振会議の事務局職員でもある佐藤七夫氏は、文化庁派遣の海外事情視察団（全国で３名）に決定、11月４日から20日間にわたり、イギリス、イタリアフランス、西ドイツ等の文化施設や文化行政等を視察することになりました。実り多い研修の実をあげられてこられることを期待します。

かわの眼科
河野　彰
大分市府内町２丁目５－９（トキハ北口通り）
TEL　大分（0975）32－2480
36－7547